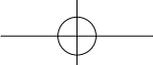


Frantz Funck-Brentano
LE DRAME DES POISONS
—étude sur la société du dix-septième siècle—
Préface de M. Albert Sorel,
de l'Académie française.
13^e édition
Librairie Hachette
1920



ヴィクトリアン・サルドゥー氏⁽¹⁾に
敬愛と感謝の証として。

フランツ・ファンクllブレンターノ

序文

アルベール・ソレル^①

I

フランツ・ファンク・ブレンターノ氏は、学者であると同時に、傑出した作家の一人だ。人間の実相を探究し、それを表現するすべを心得ている。人間の情動やあさましい性情を緻密に分析することができる、また、人間のそうした側面を鋭く感じ取り、描き出すことのできる人物だ。このたび出版された本書により、彼に対する評価はこれまで以上に高まり、その名声もさらに広まるに違いない。

『パリ毒殺劇——ルイ十四世治下の世相』というタイトルも興味をそそる。内容もその期待に応えるものだ。本書で語られているのは、どれも実際に起きた事柄である。すべての陰謀、曲折をきわめる出来事、おぞましい所行、にわかには信じがたい事象、そして「黒ミサ事件」さえも現実にあつたことなのだ。この現実、もつとも奇抜な発想の創作劇をものぐものである。これら一連の背筋も凍るような出来事が劇作家らの食指を動かしたであろうことは、想像にかたくない。しかし、どれほど才にたけた人物でも、いざこれらの出来事をテーマとして組上にのせるとなると二の足を踏んだはずである。ましてやさほど才能のない者は、とうてい歯が立たないと落胆したことだろう。当時に比べ、

今日では、演劇における表現の自由度ははるかに増しているし、われわれ自身も、自分たちが思っている以上に、十七世紀の一般社会に浸透していた偏見や先入観から解放されている。とはいえ、そのわれわれでさえ、本書に綴られている現実を前にしては、途方に暮れてしまう。とどまるところを知らないふしだらな行為、これでもかとはかりに重ねられる犯罪の数々、おぞましくも卑劣な所行の連続には、ただ当惑するしかない。

本書において著者が語っていることがいかに信憑性の高いものであろうと、彼は誇張のそしりをまぬがれないだろう。三世紀も前に起きたこれらの出来事を直接見聞きした人びとはもうどこにもいない以上、著者が世間の指弾を浴びることこそないにせよ、大袈裟だ、歴史を歪曲していると思われるのはまず間違いない。なぜなら、通常、人びとは、なにごとにつけ、学校で習得したような教科書的見解、つまり、型にはまったものの見方を、鵜呑みにしつつづけているからだ。そして、この型にはまったものの見方を根拠に、過去における出来事の信憑性の度合いに判断を下す。とりわけ、十七世紀という時代の特性に関する一般的概念は、きわめて画一的であり固定的だ。サン＝シモンやミシユレがその実態に関する記録を数多く残しているにもかかわらず、今現在も、ほとんどの人が、ルイ十四世が君臨したこの時代の歴史、いわゆる「大御代」の歴史を、楽屋も奈落もない舞台上で上演される、華やかで健全なスペクタクルのように思い込んでいる。ヴェルサイユ宮殿の豪華な装飾やこの時代に記された散文のたぐいまれな構成、この時代を代表する劇作家ラシーヌの崇高な作風が、人びとにこのような幻影を与えつづけてきたのであり、今後もこれが変わることはないだろう。あの美しい庭園が糞尿にまみれ、あの黄金と大理石の宮殿がその内部に貫流する薄暗く汚れた下水道から立ちのぼる

悪臭に毒されていた、などと誰が信じたがるだろう？ ラシーヌや宮廷のおかかえ説教師ブルダルー

は、ヴェルサイユ宮殿というこの大舞台の楽屋裏を、大御代の奈落の底を、注意深く見つめ熟考を重ねていた。しかし、その実態に関する彼らの指摘や言及は、多くの場合、別世界の出来事でもあるかのように受け流されてしまっている。まるで、ラテン語でも読むように。周知の通り、ラテン語は、

あくまでも目で習得する言語であり、この特殊性ゆえに、「破廉恥な言葉を臆することなく口にする
ことのできる」言語だからだ。つまり、教会ないし学術上の用語であって、日常用いることのない言語であるため、ラテン語で語られる言葉は、その発言内容がどれほど過激でも、人びとの琴線に直接触れることもなければ、鈍った神経を覚醒させるほどの激しさで訴え掛けてくることもないのである。

スタンダールは、ルイ十四世時代特有の極度に礼節を重んじる風潮や極度に細かい社交上の配慮が、あの時代から暴力性や扇情性を排除した、と断じた。知る人ぞ知るこの速断は、いまだに、多くの人
の思考を漠然とではあるが支配しており、こんな風評さえまかり通っている。

「暴力性や扇情性こそが現代劇の原動力である。ところが、昨今再演されている当時の演目にはそれ
らの要素が欠けている。それは、とりもなおさず、あの時代には、そうした要素が排除されていたか
らにはかならない」

だが、そんなことはない。この点については、サラ・ベルナル主演の『フェードル』やムネース
リーが演じる『アタリー』を観ればすぐにわかることだ。どちらも、ラシーヌによる格調の高い台詞
の裏に秘められた激情が、現代的な口吻に移しかえられ、当代の名優らによりきつちりと表現されて
いる。

I マリー＝マドウレーヌ・ドウ・ブランヴィリエの行状

ブランヴィリエ侯爵夫人は、今もなお、わが国における司法史上もつとも有名な人物の一人である。重ねた罪の大きさ、出自の華やかさ、訴訟経過及び死にいたるまでの状況は、今後も、歴史的事件に関心のある人びとの注意を喚起させつづけることだろう。訴訟経過及び死にいたるまでの状況については、彼女の聴罪司祭であったピロ神父が手記を残しており、これは、フランス文学における傑作の一つといっても過言ではない。ともあれ、最終的に、彼女は、その気質にやどる並はずれてエネルギー豊富な精神力により、処刑後、一部のパリの民衆から聖女とみなされるまでになった。

歴史家ジュール・ミシュレは、雑誌『二つの世界』〔一八六〇年四月一日号〕に、ブランヴィリエ侯爵夫人に関する一文を掲載しているが、これはきわめて不正確かつ欠陥だらけの記述であり、これに比べたら、アレクサンドル・デュマ・ペールの短編『著名な犯罪、ブランヴィリエ侯爵夫人』〔一八五六年出版〕のほうが、少なくとも歴史的観点からは、ました。歴史学者のピエール・クレマンは、『ルイ十四世治下のパリ警察』〔一八六六年出版〕の中で、また、最近ではコルニユ弁護士が、破棄院での弁護士による実地研修会再開のおりのスピーチで、この凶悪な犯罪事件について言及している。くわえて、先頃あらたな資料も見つかり、本章ではこれらの資料を踏まえたいうえでの記述が可能になった。

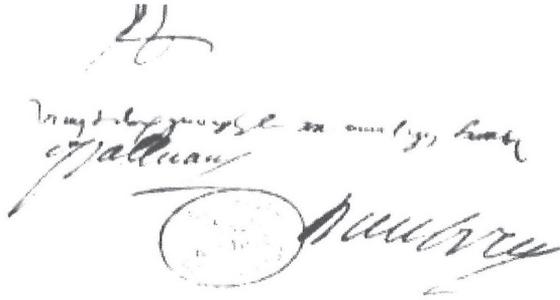
歴史家にとり、ブランヴィリエ侯爵夫人を被告とする訴訟事件は、きわめて興味深い事例である。



ドゥリュエ・ドブレイ、ブランヴィ
リエ侯爵夫人の父。

これは、その数年後、ルイ十四世による治世の最盛期に宮廷で起きた大胆不敵な毒殺騒ぎの遠因となつた事件であり、太陽王の宮廷を舞台に繰り上げられたこの騒動では、フランス屈指の名家がつぎつぎに巻き込まれ、面目丸つぶれの状況に追い込まれることになる。また、ブランヴィリエ侯爵夫人は、奔馬にもたとえられる並はずれて激しい気質、今後徹底的に研究する価値があるのではないかと思える気質をそなえた、あるタイプの女性を具現しており、いずれわれわれは、似たようなタイプの女性が繰り上げる大事件を目の当たりにすることになる。ブランヴィリエ夫人以上に激しい気質の女性が、玉座の周辺で、これでもかとはかりに繰り広げる思いも掛けない大事件を。

マリー＝マドゥレーヌ・ドブレイ、すなわちブランヴィリエ侯爵夫人は、一六三〇年七月二十二日、オフエモン及びヴィリエの領主、ドゥリュエ・ドブレイの長女として生まれた。下に四人の弟妹がいる。ドゥリュエ・ドブレイは、コンセイユ・エ・デ國務諮問会議の評定官、高等法院主任審理官、プレヴォイユ・コンテパリの地方行政官管区裁判所の民事代行官、フランス鉦山鉦石総司令官の肩書きを有する高級官僚であり、父親はソワソン出身のフランス財



マリー＝マドゥレーヌ・ドブレイの署名

務官だった。

マドゥレーヌ・ドブレイはきちんとした教育を受けていた。少なくとも、文学的教養という見地からは。彼女がしたためた手紙の綴りは正確であり、これは当時の女性としてはまれなことである。書体はさわめて流麗で、力強く、メリハリがあり、むしろ男性的な書体、それも一時代前にさかのぼったような——癖の強い——古風な書体である。しかしながら、宗教的教育に関しては、まったくないがしろにされていた。死の前日に交わされた聴罪司祭との対話のさい、宗教におけるもつとも基本的な箴言、つまり、通常子供らが日々の営みの中で習得し決して忘れることのない教訓や格言のたぐい、が一切身に付いていないことを露呈したのである。

こと道德的教育に関しては、完全に欠落していた。すでに五歳から、マドゥレーヌは恐るべき悪癖にふけており、七歳で処女を失う。ミシュレはこれを、「少女の小さな過ち」と呼んでいる。ほどなく、彼女は弟らに身を任せた。その経緯については、当人が法廷で詳しく証言している。彼女は、生来、激情的で興奮しやすい気質の持ち主であり、この気質が、天性の並はずれたエネルギー

北澤 真木（きたざわ・まき）

1966年、早稲田大学文学部（美術史）卒業。

1970年、スウェーデン、ニッケルヴィク美術学校（デキスタイルデザイン）卒業。

1977年、フランス、パリ第4大学（キリスト教史）中退。

主訳書 F. クライン＝ルプール『パリ職業づくし』（論創社）、ジャック・マイヨール『海の記憶を求めて』（翔泳社）、アンドレ・ヴァルノ『パリ風俗史』（講談社学術文庫）、アルフレッド・フラン克蘭編著『18世紀パリ市民の私生活』（東京書籍）など。

パリの毒殺劇——ルイ十四世治下の世相

2016年4月25日 初版第1刷印刷

2016年4月30日 初版第1刷発行

著 者 フランツ・ファンク＝ブレンターノ

訳 者 北澤真木

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1504-6 ©2016 Kitazawa Maki, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。